

北朝鮮の大学教員となった京都の留学生たち

板垣竜太(同志社大学; ritagaki@mail.doshisha.ac.jp)

はじめに

通過点としての留学

「留学経験」とは、留学している間だけの経験だけではなく、その前後の（より長い）人生の経験と合わせて考える必要がある

本報告の対象

京都の大学等に通った朝鮮人留学生のうち、1946～49年のあいだに北朝鮮(1948.9～朝鮮民主主義人民共和国)の大学教員となったことが履歴書(後述)で確認される人々

本報告の位置づけ

李升基のような有名人物だけではなく、京都での学習・研究歴をもつさまざまな人々が、多様な経緯と動機をもって朝鮮戦争前の北朝鮮で大学教員となっていく様相を探る基礎調査

1. 資料について

1-1. 北朝鮮鹵獲文書

- 鹵獲文書ろかく（鹵獲＝戦争の一環として敵の兵器・軍用品などを奪い取ること）
国立公文書記録管理局=NARA (The National Archives and Records Administration)
Record Group 242: National Archives Collection of Foreign Records Seized, 1675–1958
（現在は Archives II=The National Archives at College Park, Maryland に所蔵）

RG242 のなかに朝鮮戦争時の北朝鮮からの鹵獲文書がある

- 米軍の北朝鮮鹵獲文書(Records Seized by U.S. Military Forces in Korea)

資料の辿った経路¹

国連軍・韓国軍による北朝鮮の鹵獲資料

→極東司令部軍事情報局 連合翻訳通訳部(ATIS)が重要文書(A=選別鹵獲文書)を翻訳

→残り(B)を連邦記録保存センター(Federal Record Center, Virginia)へ

→1957、BがNARAへ

→1977、Bが機密解除されて公開される

→1990、A(選別鹵獲文書)も機密解除されて公開される

軍事・外交以外のさまざまな公文書が鹵獲資料に含まれる²

¹ 국사편찬위원회(2002)所収の方善柱氏の解題より。

² 軍事情報収集活動の一環として資料を鹵獲することが、当時の戦時国際法のなかでどこまで認められていたかは不明。略奪行為は古くから禁止されているが、ハーグ陸戦条約(1907)第53条には「一地方を占領した軍は、国の所有に属する現金・基金・有価証券、貯蔵兵器、輸送手段、在庫品・糧秣、その他作戦行動に供しう

大学関係の内部文書をも含む

1-2. 大学教員の履歴書類

○大学教員の履歴書類の位置づけ

RG242 函獲文書中の大学関係資料のうち履歴書類

各大学で作成し教育担当政府機関*で保管していた書類の一部と思われる

* 北朝鮮(臨時)人民委員会教育局 → 1948.9～ 共和国教育省

学位・学職授与の仕組み(1948.10 の内閣決定による)³

国家学位授与委員会：学位(博士、学士)、学職(教授、副教授、助教授)の授与などをおこなうために教育省内に設置

学位と学職：教授←博士、副教授←学士、助教授←大学卒業者から総長推薦

この規定にもとづき 1948.10 以降に大学総長から教育相に提出し、国家学位授与委員会で審査したのちに、教育省内に保管していたものが多いと思われる

○履歴書類の形式

一般的な構成要素：全て揃っていない場合もある

①履歴書：様式は大学／作成年度によって違いがある

②自叙伝：自筆による経歴説明の作文

③評価書：「評定書」「調査書」などの名称

④証憑書類：卒業証明などが添付されているケースがある(多くはない)

(出身成分(階級)・経歴・思想を含め履歴を審査し、業績リストなどはない)

自叙伝作成要綱(1947年頃)⁴：以下を盛り込むことになっていた

1. 父母の環境(生活)、本人出生時からの経済的・思想的動向
2. 親戚・姻戚・友人中で思想的その他身上の重大な問題に影響を受けた事実
3. 生活地域移動(どこからどこに、何の理由で移住したのか)
4. 学校において特記すべきこと：(1)苦学または他人の援助を受けた事実、(2)xx 学校等卒業、同名休学関係等、(3)転校、転勤した事由、(4)自習の如何、現在の知識は如何
5. 闘争経歴中、特記すべき構想事実あるいは転向したその理由および証明書
6. 職場関係において特記すべき事実：(1)誰の紹介(あるいは援助)ですることになったのか、(2)事実程度において何か重要なことがあったか
7. 38 度線以南に親戚関係あるいは自己の直接関係(以南の親戚の職業、住所、活動、関係、賞別等)
8. 北朝鮮の土地改革による影響有無(その数字)

るすべての国有動産にかぎり、これを押収することができる」とする。このあとで分析する大学教員の履歴書が「作戦行動に供しうる国有動産」に入るといえば無理があるだろう。

³ 内閣決定 50 号「國家學位授與委員會에 관한 規定」(1948.10.26)、同 51 号「學位 및 學職授與에 관한 規定」(1948.10.26) (『조선민주주의인민공화국 내각공보』1948-1)。

⁴ 「自叙傳作成要綱」(國史編纂委員會『北韓關係資料集 IX』1990, pp.93-97)。この要綱は「保安例規」の一部のようである。

9. 祖国解放運動での功勞の有無(監獄生活、政党關係、社会団体關係、暴動等の事実)

10. 親戚(直系および傍系)の3寸〔親等〕までの住所、職業、政党關係、家庭環境を詳細に記録すること、あるいは友人まで記入すること

○確認される大学および専門学校教員の履歴書類

今回はNARAで直接調査する余裕がなく、韓国内の複製資料を利用

(中)=国立中央図書館：一部を収集しウェブサイトの「海外収集資料」でカラー公開

(史)=国史編纂委員会：一部を収集しマイクロフィルム&紙焼きで公開⁵

前者の方がきれいで見やすい

大学の履歴書類は「教員」と「幹部」に分かれるが、今回は教員のみを対象とする

高等教育機関(1950年時点)：大学12、専門学校(技術専門55+師範専門14)⁶

【大学】(そのうち今回分析対象とするものに*印をつける)

金日成(総合)大学

文学部(中)*：38名分；NARAでも直接確認した。1946後半～47年前半とりまとめ

履歴書・調査書のみで自叙伝はなし

医学部、鉄道工学部：NARAで履歴書の存在のみ確認

平壤医学大学(史)*：54名分；1948年10月以降とりまとめ

平壤工業大学(中)*：40名分；1948年10月以降とりまとめ

咸興医科大学(史)*：35名分；1948年10月以降とりまとめ

興南工業大学(中)*：53名分；1948.11.30 & 1949.2.25 とりまとめ

清津医科大学(史)*：13名分

清津教員大学(史)

【専門学校】(以下すべて国史編纂委員会に複製所蔵&今回は検討対象外)

平壤師範専門学校 平壤女子師範専門学校 咸興師範専門学校 元山師範専門学校

海州師範専門学校 載寧女子師範専門学校 鉄原師範専門学校 鉄原農業専門学校

北青土木専門学校 清津電気専門学校 平康畜産専門学校 新義州水産専門学校

徳源農林専門学校 松林工業専門学校

○履歴書関連資料の限界と意義

限界：

①書類内容がバランスよく客観的に事実を反映しているとはいえないこと

②資料作成時点で在職している者に偏っていること

意義：一定の網羅性があるとともに、他では得がたい個人史的内容を含んでいる

→今回は1945年以前に京都留学経験を持つ者を抽出して紹介する

2. 朝鮮戦争前における北朝鮮の大学概要

○植民地末期の朝鮮半島北部の高等教育機関(以下、1943年度時点のデータ)

⁵ 国史編纂委員会所蔵資料については水野直樹氏から提供していただいた。この場を借りて感謝したい。

⁶ 数字は『朝鮮中央年鑑 1950年版』(朝鮮中央通信社, 1950, p.345)。

大学：なし（京城帝国大学のみ）

官立専門学校：なし（京城：法学・医学・工業・商業・鉱山、水原：農林、釜山：水産）

公立専門学校：平壤医学専門学校（もう1校は大邱医専）

私立専門学校：大同工業専門学校（残り10校は南部）

官立師範学校：平壤、咸興、新義州、海州、清津（残り10校は南部）

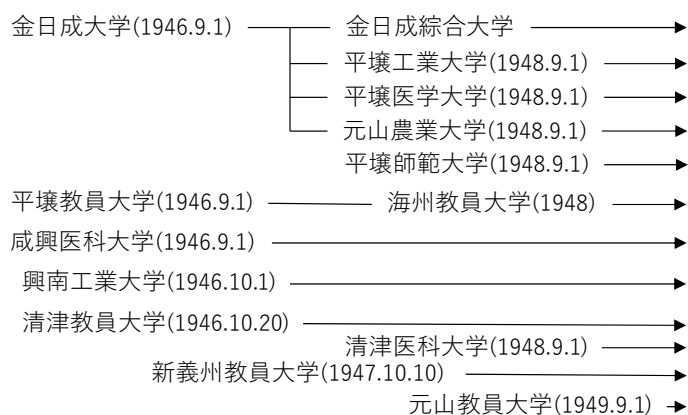
そもそも朝鮮内にない高等教育機関：高等学校、高等師範学校、女子高等師範学校

⇒教員人材を北部に限らず広く集める必要が生ずる

○金日成(総合)大学を中心とした改組過程(朝鮮戦争前)⁷

	1946年7月 組織案 7学部24学科	1947年3月 改組 8学部39学科	1948年7月 改組 5学部22講座	1949年9月 10学部24講座	
金日成大学 (1949.9.1)	文学部	歴史文学部	金日成総合大学	歴史学部	
				朝鮮語文学部	
				外国語文学部	
				教育学部	
				地理学部	
	法学部	経済法学部		経済法学部	法学部
	理学部	物理数学部		物理数学部	経済学部
		化学部		化学部	物理数学部
				生物学部	化学部
					生物学部
	工学部	工学部	→平壤工業大学(1948.9.1)		
	鉄道工学部	運輸工学部	(→金策工業大学)		
	医学部	医学部	→平壤医学大学(1948.9.1)		
	農学部	農学部	→平壤農業大学(1948.9.1) (→1949.9.1 元山農業大学)		

○大学の変遷(概略)⁸



※この他に平壤露語学校(1948.4.1-)、国立音楽学校(1949.3.1)、国立美術学校(1949.3.1)あり。

⁷ 『김일성종합대학 10년사』(1956)、「北朝鮮高等教育事業改善に関する決定書」(1948.7.7, 北朝鮮人委決定157, 北朝鮮人民委員會『法令公報』第56號, 1948.7.22)より作成。

⁸ 『해방후 10년간의 공화국 인민 교육의 발전』(교육도서출판사, 1955, pp.38-41)、『朝鮮中央年鑑1950年版』(朝鮮中央通信社, 1950, p.346)より作成。設立年月日は主に後者によるが、実態とは多少ズレがある。

3. 北朝鮮の大学教員となった京都の留学生

※以下、大学別にまとめる。

3-1. 金日成綜合大学文学部

①朴克采^{パククツァエ}

履歴書(1946.10.31 作成)

- 履歴書作成時に文学部長
- 1904.7.24、平安北道宣川郡南面生まれ 出身「小地主」
- 家庭状況(8.15 以前)：本人戸主、職業=教員、不動産：家屋2棟・水田約1万坪
- 家庭状況(8.15 後)：不動産→家屋1棟となる
- 参加団体：1945.10に京城にて朝鮮共産党(南朝鮮)に入党し文化活動をおこなう。加入時保証人は崔容達と李観述。
- 学歴・経歴(抜粋)

1916.3	(宣川) 三峰公立普通学校卒業
1924.3	光成高等普通学校第4学年終了
1925.3(入学)-1928.3(卒業)	(日本) 山形高等学校文科
1928.4(入学)-1931.3(卒業)	(日本) 京都帝国大学経済学部
1931.4(入学)-1934.3(卒業)	(日本) 京都帝国大学経済学部大学院
1934.4-1946.3	普成専門学校 教授
1945.12-1946.3	京城大学 教授
1946.3	(京城) マルクス・エンゲルス・レーニン研究所研究部長就任 (他に越北前に朝鮮科学者同盟委員長、文科団体総連盟副委員長)
1946.9	(平壤)北朝鮮金日成大学 文学部長 就任

調査書→略

補足

- 朴克采については、洪宗郁「解放前後における統制経済論の展開：マルクス経済学者の朴克采・尹行重」⁹を参照。同研究によれば朴克采は、「リカルドオの比較生産費説について」(1935)、「地代論と価値法則：日本に於ける論争問題を中心に」(1935)とマルクス主義経済学にもとづく価値論を展開したが、日中戦争勃発後は経済「新体制」論に乗るようなかたちで「支那事変と国民経済」(1938)、「大戦と交戦国の経済」(1939)、「経済新体制確立要綱」(1941)、「東亜広域の基本問題」(1941)、「新嘉波陥落と世界史的意義」(1942)、「インフレーション問題」(1944)などを公刊するなど、「広域経済」論を通じて「大東亜共栄圏」構想に協力的な態度をとった。解放後は左派イデオログとして活躍し、「土地及農業政策の基本方向」(1945)、「朝鮮経済建設の基本方向」(1946)、「朝鮮封建社会の停滞の本質」(1946)などを発表。1946年7月の米軍政による国立大学設立案(国大案)批判の中心人物となり、越北する。越北後の論文は確認されておらず、1950年代前半以前に亡くなった模様。

⁹ 洪宗郁(2011:第4章)。これ以前にも、朴克采については何本か論文がある。

- 函獲文書中の大学内部資料(1947年)¹⁰では、朴克采の名は次のように出てくる。
- 1947.2.17 全大学内社会科学カフエドゥラ¹¹副学長および運輸工学部長任命の内申。
- 1947.3.6 工学部長任命の内申
- 1947.3.21 工学部・医学部・物理数学部・化学部で「マルクス・レーニン主義基本」や「政治経済学」の科目を担当。

② ^{リム ドゥソン}林斗成

履歴書(作成日不明：1946年中と思われる)

- 1913.11.1、平壤 船橋里生まれ
- 家庭環境(8.15前)：戸主・工場事務員、土地約4,000坪
- 家庭環境(8.15後)：戸主・教員
- 現職：金日成大学文学部教員（紹介人：金光鎮法学部長）
- 参加団体：労働党(1946.7.1、北朝鮮人民委員会細胞)、加入時保証人は崔容達
- 学歴・経歴
 - 1921.4.1(入学)-1927.3.31(卒業) 平壤鍾路普通学校
 - 1927.4.1(入学)-1932.4.10(卒業) 平壤公立高等普通学校 (卒業)
 - 1934.4.10(入学)-1937.3.20(卒業) (日本) 佐賀高等学校 理科 (卒業)
 - 1937.4.10(入学)-1940.3.20(卒業) (日本) 京都帝国大学文学部哲学科
 - 1940.4.5-1940.11.3(辞職) (日本) 東京富国工業株式会社 調査課 書記
 - 1940.11.4 日本警察に被逮 →1941.10.30 日本 京都裁判所で判決言渡、釈放
 - 1942.1.20-1944.2.15(辞任) (江原道洪川郡) 大盛鉱業所 総務
 - 1944.4.5-1945.1.20(辞任) (京城) 重要物資営団 工業課 書記
 - 1945.2.1-1945.8.14(辞任) (平壤) 正昌ゴム工業所 書記
 - 1945.8.15 平安南道人民委員会 工商部
 - 1946.4.15-1946.9.20(辞任) 北朝鮮人民委員会産業局金属工業部
 - 1946.9.21 金日成大学文学部

調査書 →略

補足

- 1940年の逮捕については、内務省警保局『社会運動の状況 昭和十六年』に次のような記述あり¹²。

在京都朝鮮人学生共産主義グループの活動について

1、策動概要 京大を卒業し上京後、夫々会社員等に就職在京中の林斗成、朴華英を中心とする許日禧外六名は、昭和九年四月佐賀高等学校在学当時より共産主義的に意気投合し、爾来同志として結集し策動しつつありたり。即ち朴華英、林斗成は、昭和九年四月佐賀高等学校に入学し、同校先輩学生李有浩(目下鮮内在住)、内地人山口正之(警視庁に於て検挙さる)及び同校教授小島尚、三井清等に接するに及び之等の指導、啓蒙を受け、共産主義理論に共鳴し、朝鮮をして日本の覇権より離脱せしめ、朝鮮民族の解放を遂ぐるには、共産主義社会を実現せしむるに在りと思惟するに至り、当面して自己等は朝鮮民衆に対し民族意識の昂揚を図ると共に、共産主義思想の宣伝啓蒙を担当する中核体の結成を遂ぐべきなりと為し、同志の獲得啓蒙に奔走し、遂に昭和十一年四月、佐高に在学中の許日禧、金原培濬、金昌煥、文在洙外三名を逐次同志として獲得し、先輩李有浩、山口正之等の指導の下に屢

¹⁰ 北朝鮮人民委員会教育局「一九四七年度 金日成大學發令件」(教幹第26號、RG242:SA2006/12/32.1)。

¹¹ Кафедра=学科

¹² また、国史編纂委員会・近代史年表(ウェブ版)では、1941年10月24日に「林斗成、京都地方裁判所で懲役刑言渡」とある(出典は援護処『独立運動史資料集 3』)。

「マルクス主義の研究会を持ち暗躍せり。更に、林斗成は昭和十二年四月、金原培濬、許日禧、金昌煥、文在洙は昭和十四年四月京都帝国大学に入学するや、学内に秘に佐高グループを結集し、在京都朝鮮人学生に働きかけ、同志社大学朝鮮人学生金玉均、韓根鎬、第三高等学校雀相業、韓健河等を同志として獲得し、在東京朴華英、山口正之等と連絡を執りつゝ屢々秘密協議会を持ち、

(イ)朝鮮民族解放の為、献身するは朝鮮人インテリの使命なること。

(ロ)共産主義理論の把握に精進すること。

(ハ)朝鮮語、朝鮮文化の保持に努むること。

(ホ)在京都朝鮮人学生学友会を指導すること。

(ヘ)同志の獲得を遂ぐること。

等につき協議決定し、或ひは検挙に至る迄、極秘裡にマルクス主義研究会を持ち、前後十数回に互り会合研究する等、策動を遂げつゝありたり。

2、京都に在りては、客年十月十四日以降、関係分子十名を検挙し取調べたるが、本件の中心人物たる朴華英が取調中、本年三月十三日死亡せる等の事情にて、其の策動の実質の全部を究明しかねるの止むなきに至り、残余九名のみ夫々治維法違反として四月十一日所轄京都地方裁判所検事局に送局せり。

○前掲・鹵獲文書中の大学内部資料(1947年)には、林斗成について次のような記述あり。

1947.2.17 内申書中に歴史文学部アスピラント¹³とある。

1947.3.6 工学部副部長に任命することを内申。

金日成大学補足

○1947年7月19日付の金日成大学副総長(朴日)名義のマル秘文書「大学教員招聘依頼の件」¹⁴は、教員の大幅増員のために北朝鮮内の他職場、朝鮮半島南部および海外にいる研究者の招聘候補者をまとめたリストである。招聘必要総数78名(候補者名空欄もある)中、最終出身校が京都大となっている者が3名いる(下記)。1名は既に北朝鮮におり、2名はその後実際に越北した。

所属学部	担任学科	招聘する教員名	最終出身校	住所又は職場	専任・講師別	備考
経法	統計学	黄道淵	京都大	産業局	専	
工	電気学	李聖濬	京都大	京城技術院	専	○
工	高分子科学	李升基	京都大	京城技術院	専	○

(備考)「○」は「南朝鮮居住者(別途交渉中)」とある。

3-2. 平壤医学大学

③李聖塾^{リソンスク}

履歴書(1948.10.23 作成)

○1914.3.1、平安北道龍川郡外下面出生(現住所は新義州市)

○父母関連情報: 8.15前、新義州振興組合事務員(財産規模5万ウォン) → 8.15後、3万坪の土地没収; 無職(財産規模2千ウォン)

○本人情報: 土地の没収・授与なし; 財産家1軒; 最終卒業学校=専門学校、学位=医学博士; 知識「皮膚ホルモンの実験的研究」; 技術=医師(皮膚泌尿科専門)

¹³ Аспирант=大学院生と訳しうるが、既に教鞭をとっているため、どういう意味かは不明。

¹⁴ これも前掲・朝鮮人民委員会教育局「一九四七年度 金日成大學發令件」に綴られている。

○学歴、経歴：普通学校の箇所には年月日の記載がない。()で補足記載

1922.4-1926.3 (新義州市) 普通学校
(1926.4-1931.3) (新義州市) 高等普通学校
(1931-1935) 京城医学専門学校・学生 → 助手 → 講師
() 京都帝国大学・研究 → (1943.2) 医学博士
(1944) (新義州市) 大同医院・医院長
(1945.8) 新義議州臨時自治会・委員
() (平壤) 平安北道人民委員会・保健局副局長
(1946?) (平壤) 金日成大学医学部・教授
() (平壤) 北朝鮮赤十字社・副総裁
(1947.5-1948.3) (新義州) 病氣静養
(1948.3-) (新義州) 中央病院皮膚室・責任者
1947.11-1948.10 [兼業として] 新義州医学講習所・講師
() 平壤医科大学

※疑問点：①主経歴での日付欠落の理由；②京都帝大の所属

○外国語：日本語-能通；英語-解読する程度；ドイツ語-解読する程度

自叙伝(抜粋、要旨)

- 祖父は李ギドゥ(리기두)、父は李亨観^{リヒョングァン}。当時は「雑貨商、米穀商などを経営して何とか生計」を立てられる程度。父は民選の府会議員に当選¹⁵し、「倭政下で無関心だった朝鮮同胞の厚生問題のために闘争し、また自作農創定運動¹⁶など当時の進歩的意見を斉唱し、倭人の注目をひいた」。
- 1931年に京城帝大と京城医専の両方に合格したが、「財政上の関係で」、京城医専を選んだ。1935年に卒業したが、「形式的な倭政の保健作風のせいで同胞間に広範に蔓延していた性病状態を見て、これと闘争することを決心し、京城医学専門学校皮膚泌尿科助手として入室した。」「入室後10年間、倭人の賤待と差別待遇に激憤もしたし、国なき民の悲しみに泣きもしたが、ただひたすら学ぶために努力した。昼には臨床で患者診療に、夜には研究室で研究実験と、実に寝食を忘れて努力した結果、1943年2月、医学博士の学位を授かることになった。」¹⁷
- 学位取得後、そこから抜け出そうとしたが、「医師が不足しているという理由でやむを得ず奴らの調査課を1年したのち、1944年かろうじて故郷新義州に帰って大同医院を開設、性病根絶の理想をもって努力してきたのである。」
- 解放後、新義州民衆大会で選ばれ新義州臨時自治会委員となった(履歴書と重なる部分は飛ばす)。1947年5月、過労により肋膜炎にかかって帰郷、修養したのち、1948年3月から新義州中央病院皮膚科の責任となった。

¹⁵ 当時の『毎日申報』などで、李亨観の選挙結果や議員活動をいくつか確認することができる。

¹⁶ 自作農創定は1930年代に朝鮮総督府が農村振興運動と連動させて「上」から進めようとした政策の名称であるが、それとの関係は不明である。

¹⁷ 自叙伝にはなぜか京大の名前が出てこない。京大文書館でも、1943年の学位授与関係書類に李聖塾らしき人物は確認されないという(水野直樹氏の教示による)。

④任聖宰

履歴書(1948.11.21 作成)

- 1921.10.28、平壤(府)上水口里に生まれる。
- 父母関連情報：8.15 前後ともに職業は「麵屋」、「家1軒」所有。
- 本人：最終学歴「ソウル大学医学部」；技術「最近技術、医師」
- 学歴・経歴
 - 1929.4-1936.3 平壤 上水公立普通学校
 - 1936.4-1941.3 平壤 光成高等普通学校
 - 1941.4-1943.9 満洲 旅順高等学校 理乙 学生¹⁸
 - 1943.10-1945.7 京都 京都大学医学部 学生
 - 1945.7-1946.3 ソウル大学医学部 学生¹⁹
 - 1946.4-1946.12 ソウル大学附属病院 内科助手
 - 1947.1-1948.8 金日成大学医学部 研究員
 - 1948.8-1948.11 平壤医学大学衛生学部・研究員
- 外国語：ロシア語(読書、簡単な会話)、英語・ドイツ語(読書、作文)、フランス語(読書)、日本語(読書、作文、会話)

自叙伝(抜粋、要旨)

- 次男で生まれたとき父は精米所をしていたが、失敗して一文無となり、その後、母が麵ツクスの商売をはじめた。普通学校の成績は優秀で、大学に在学していた従兄に憧れて大学に行きたいと思っており、父も勉強しろと言ってくれた。父は光成中学校5年のときに亡くなった。工業に関心をもち、「わが朝鮮の電気工業を発展させる必要があると思って」志願したところ、旅順高等学校に合格した。「当時の中学校長の補助を受けて学資を充当」した。日本人生徒と「感情問題で衝突が激しくなっていた」ところ、「ちょうど日米戦争が第三学年末に」はじまった²⁰。
- 「1942〔1943?〕年10月1日、日本の京都大学医学部医学科に入学。朝鮮人学生が最も多く、また朝鮮人大学教授もいるという理由で、また最も自由で進歩的な大学だったため、多くの友人と交際することになった。医学技術を錬磨する一方、友人らの検挙事件などにより左翼思想、マルクス主義に対して関心をもつことになった。学徒兵問題が起こると、倭奴らはわが青年も自分の帝国主義戦争の犠牲にさせようとしていることを知り、多くの友人らは逃げ、行かなくてすむように工作をしていた。ある友人からマルクスに関する書籍をうけとり、秘密裏に勉強していた。1945年7月、日本への爆撃で大部分の都市は破壊されてしまった。このとき京城大学に転校させてくれるということになったが、またわれわれを犠牲にするのではないかと思い、転校するという理由で家に帰

¹⁸ 旅順高等学校は、1940年、大日本国内で設立された最後の官立高等学校である（なお、旅順は満洲ではなく関東州）。『旅順高等学校一覧 自昭和十六年四月 至昭和十七年三月』（1941）の「理科第二学年乙類B組」に、平安南道の光成中出身として「豊川聖宰」の名が見える（79頁）。1941年に第2学年に入学したのか、履歴書がまちがえていて1940年入学なのかは不明。

¹⁹ ソウル大という名称は1946年8月以降であり、1945.7ならまだ京城帝国大学、解放後は京城大学。

²⁰ 3年生なら1942年度のはずで、既に太平洋戦争ははじまっており、ここで「はじまった」という「日米戦争」が何を意味するのかわからない。旅順の高校にいた一朝鮮人にとって、戦局がどのように見えていたのか…。

ることにした。」

- 解放後、京城大学の第4学年に入った。1946年3月、第1回ソウル大卒業生となり、4月から城大附属病院の内科助手となった。1946年10月に休暇を利用して家に帰ったところ、金日成大学の創立の話を聞き、細菌学教室の研究員(大学院生)となった。予防医学の方面で多くの努力をしている。兄はまだ麵^{クッスチャンサ}売をして暮らしている。

3-3. 平壤工業大学

⑤裴準鎬

履歴書(1948.10.11 作成)

- 1920.9.18、慶尙北道大邱市寿洞で生まれる。
- 父母情報：8.15前=地主、8.15後=父死亡・母無職
- 本人情報：政党=朝鮮人民党；知識=京都帝国大学卒業；技術=電気技術
- 学歴・経歴
 - 1926.4-1931.3 大邱公立普通学校・生徒
 - 1931.4-1937.3 大邱公立高等普通学校・生徒
 - 1937.3-1938.3 (京都市) 高等予備学校・学生
 - 1938.4-1941.3 (仙台市) 第二高等学校理科・学生
 - 1941.4-1943.9 京都帝国大学工学部電気工学科・学生²¹
 - 1943.9-1943.12 京都帝国大学大学院工学部工学化学科電気化学教室・学生
 - 1944.1-1944.12 (大邱市) 無職
 - 1944.12-1945.3 (釜山市) 朝鮮航空工業株式会社製作課電気班・技手
 - 1945.3-1945.8 京城帝国大学理工学部電気科・助手
 - 1945.8-1946.3 (京城市) 無職
 - 1946.3-1946.9 京城大学理工学部電気科 電気材料 電気測定・教員
 - 1946.9-1948.7 (平壤) 金日成大学工学部電気科 電気機械 電気設計 計測・教員
 - 1948.7-現在 平壤工業大学電気工学部 電気機械 機械設計・教員
- 外国語：英語=読書できる
- 別居家族中に「裴鍾鎬(兄) 職業一医師(大邱医学大学教授)」とある²²。

自叙伝

- 余裕のある地主の3男として出生。高普に行き、「朝鮮で最も遅れた工業技術を習得」することを決心し、1937年に留学。
- 入学試験に落第し、1937年1年間は京都で勉強した。1938年に二高に入学。リ・ドンス(리동수)の指導のもとマルクス-レーニン主義を学ぶ。1939年、5名の朝鮮人中、3名とともに読書会。

²¹ 『京都帝国大学一覽』の1941・1942年版の電気工学科には裴準鎬の創氏改名後の名前「星元聰秀」が見える。

²² 裴鍾鎬は1917年に大邱で生まれ、同じく大邱高普を卒業後、大邱医専を1938年に卒業した。同年、名古屋医科大学(1939年に設立された名古屋帝国大学に統合)、副手や助手などを経て1943年に医学博士学位を取得。道立大邱病院、大邱医専で勤める。解放後は、大邱医科大学教員となり、同大が1951年に慶北大学校医科大学として統合されると医科大学・学長となる。1957年、「事情により」学長を辞職し、釜山で病院を開院したり、社会奉仕活動をしたりして暮らした。1997年没。以上、「[선구자] 배중호(裴鍾鎬): 의학교육 쇄신을 선도한」(<https://m.blog.naver.com/doohick/220464324161>)より。

○1941年、京都帝国大学に入学（この頃のことには具体的記述なし）。1943年9月、大学を卒業し12月に故郷に帰った。（このあと解放まで履歴書以上の情報なし）

○1945年10月、建国同盟（その後の朝鮮人民党）に加盟。国立ソウル大学案をめぐる闘争が長引きそうだったところ、「金日成大学から平壤行き要請があった」。1946年9月16日、平壤に出発した。

評定書 一略

3-4. 咸興医科大学

※咸興医科大学では京都に留学した人物は見当たらない。唯一の京都経験者は下記の人物であり、簡単に記す。

⑥朱洙英^{チュ・スヨン}

○1905.5.4、咸鏡南道咸州郡上朝陽面の地主の家に生まれ、普通学校卒業後、咸興高等普通学校(1915-23)を出て、東京に留学したが病気で翌年朝鮮に戻り、5-6年静養した。1928年ふたたび渡日し、日本の山形高校の生徒(1929-32)となる。熊本医科大学の学生(1934-38)および副手(1938-40)。「井上という日本人講師により朝鮮民族に対する侮辱的な言辞があり衝突した結果、内科教室を出て、1940年4月、京都帝大小児科教室で勉強した」。履歴書ではこの時期の身分として「医員介補」とある。同年10月に、前の指導教授の勧めで再び熊本医科大学・研究科学生(1940-44)。1944年に江原道立江陵医院の内科長(1944-45)。解放後は道立医院が人民病院となり、内科長・院長となる。1946.11より咸興医科大学・教員（1947.8より咸大病院・副院長）。

3-5. 興南工業大学

※興南工業大学は、朝鮮最大の工業地帯だった興南地区のインフラを背景に、公立実業学(中等教育機関)だった興南工業学校を母体とし、興南工業専門学校(1946.9)として改組、さらに興南高等工業技術者養成所を附設したのち、1947年9月に興南工業大学となった。金根培(2002:123)によれば1948年末当時、教員の2/3が越北者だった。また、学長の申建熙を含めて(53名中)6名が京大出身である。そのうち学長以外の5名はいずれも、(1)京都帝大工学部の応用化学系の学科に同じような時期に所属しており、(2)興南化学工場の現場経歴をもち、(3)化学工学部の副教授になった、という共通点を有している。京都帝大→興南の人脈については、あとでまとめて考察する

名前	生年	出身地	京都帝大		直前経歴	興南工大所属		
			学部、所属学科、所属期間	その他		職位	科目	
申健熙	1903	全南 海南郡	理学部物理学科	1930/4 1933/3	副手 1933.4-1936.2	金日成大学、中央研究所	学長	
呉東昱	1919	平南 大同郡	工学部工業化学科	1941/4 1943/9		(興南)本宮工場・技師長	副教授	有機化学
李在英	1921	平南 江東郡	工学部燃料化学科	1941/3 1943/9	助手 1943.10-1945.8	興南肥料工場・技師長	副教授	物理化学
洪允命	1918	黄海 黄州郡	工学部工業化学科	1942/4 1944/9		(興南)本宮工場・技術課長	副教授	無機化学
宋法燮	1922	全北 群山府	工学部繊維化学科	1942/10 1945/9		興南試験所・副所長	副教授	有機合成
李桂秀	1918	慶南 陝川郡	工学部工業化学科	1942/4 1944/9	化研 1944.10-1945.8	興南化学工場・技師長	副教授	分析化学

⑦ ^{シンゴニ}申健熙

履歴書(1948年作成；月日は未記載)

- 1903.11.18、全羅南道海南郡北平面で生まれる。
- 父母関連情報：地主、資産 10 万円程度
- 政党関係：労働党(1946.8.28 平壤で入党)
- 経歴
 - 1909.1-1918.3 漢文書堂・書生
 - 1918.4-1919.3 海南普通学校・学生
 - 1919.4-1919.10 監獄
 - 1919.12-1920.3 (ソウル)中東学校・学生
 - 1920.4-1924.3 (ソウル)中央学校・学生
 - 1924.4-1924.12 同志社大学・学生
 - 1925.4-1928.3 大阪高等学校・学生
 - 1928.9-1930.3 (平北 定州郡) 五山学校・教員
 - 1930.4-1933.3 京都帝国大学・学生
 - 1933.4-1936.2 京都帝国大学・副手
 - 1936.4-1938.3 (ソウル) 徽文中学校・教員
 - 1938.7-1941.10 (平壤) 大同工業専門学校・教授
 - 1943.4-1945.8 (平壤) 平壤工業専門学校・講師
 - 1945.9-1946.8 (平壤) 平壤工業専門学校・校長
 - 1946.9-1947.3 (平壤) 金日成大学・工学部長
 - 1947.3-1947.5 (平壤) 北朝鮮中央研究所・所長
 - 1947.5- 興南工業大学・学長
- 選挙：1947.9 興南工業大学・労働党細胞医院、1948.2 北朝鮮労働党興南市党委員
- 外国語：日本語=能熟；英語=専門書籍を読む程度；仏語=専門書籍を読む程度
- 行政責罰：1948.5 教育局長より警告(上部機関命令が実施できなかったという理由)²³
- 行政表彰：1948 教育局長賞(事業に熱誠)
- 解放運動・地下運動：
 - 1919.3 海南邑内、3.1 運動組織・宣伝工作 (指導者=金奎秀)
 - 1930.4-1933.3 京都大学反帝反戦同盟朝鮮学生との連絡 (指導者=農学部学生)
- 親友関係：김경홍、朴克采、尹行重、박영진

自叙伝

- 父は漢文学者で、8-15 歳まで漢文を勉強した。16 歳ではじめて普通学校に入学したが、17 歳(1919)のときに 3.1 運動に参加して捕まり、1 審で 10 カ月、2 審で 3 年の執行猶予が出て 10 月に保釈された。ソウルに上京し、1924 年に中央学校を卒業したが、その間の 1923 年に「左翼思想」に染まった。
- 「[1924 年に] 日本に行こうとしたが、3.1 運動関係者だといって旅行券〔渡航証明書のほか〕を得られなかった。しかし、日本から来た友人の身分証明書〔渡航先の証明書類か〕を入手し、無事、日本の京都に行った。高等学校入学試験は失敗したが、黄さん^{ファン・ドンム}

²³ 事情は不明ながら、自叙伝を見ると、いろいろ家庭内不和を起こしていた後妻が 1948 年 4 月にソウルに逃げたとして、反省の弁を書いているので、それが原因なのかもしれない。

(そのころ京都大学生で京都在住朝鮮人労働組合指導者)の事業を幫助し朝鮮人労働組合創設に努力し、朝鮮人労働者子弟教育を指導していた。その翌年、大阪高等学校入学後にも大阪労働者子弟教育に注力してきて、1928年高等学校を終え、病気で故郷に帰って治療したのち、病が完治すると、この年の秋に、定州の五山中学校教員となった。1933年、教員を辞職し、日本の京都大学に入学した。このとき日本では左翼運動が熾烈であり、さらに京都大学の学生運動は日本のどの大学よりも劣らないものだった。高等学校時代の同窓生の紹介で学内赤色同盟に参加し、朝鮮学生との連絡の責任をひきうけ、学校のデモ指導や朝鮮学生の反帝反戦思想を鼓吹させた。大学を卒業するころ、日本の連中の戦争準備は一層強まり、左翼に対する弾圧は言い表せないほど過酷になっていき、同志らは逮捕または逃亡し、学内の運動は挫折した。このころからは3年間、大学で理論物理だけを研究していた。1932年[...]冬に父の死により、大学の研究事業も1933年春まで中止することになった。」²⁴

⑧ オ・ドンウク 吳東昱

履歴書(1948.11.26年作成か)

- 1919.10.7、平安南道大同郡南兄弟山面で生まれる。
- 父母：「中農」で、没収前10,000坪→分与後2,000坪の農家。
- 政党関係：労働党(1947.10.18、興南市党部)
- 経歴（履歴書の様式を見間違えたためか、学歴がしっかり記載されていない）

1938.4-1941.3	(日本 島根県松江市) 学校 [=松江高等学校]
1941.4-1943.9	(日本 京都市) 学校 [=京都帝国大学]
1944.1-1946.9	(京城) 金剛製薬所・研究部
1945.11-1946.9	京城大学理工学部・講師
1946.10-	興南人民工場本部・技術部
1947.1-	本宮工場有機合成部
1947.5-	本宮工場・研究課長
1947.9-	本宮工場・生産次長(兼研究課長)
1947.11-	興南地区人民工場・技術部長
1947.3-	総合研究所・研究主任
1947.10-	本宮工場・技術長
- 外国語：英語=未熟、ドイツ語=未熟、日本語=熟達
- 表彰：産業局長・創意考案(1947.5)、人民経済=・模範労働者(1948.2)

評定書→略

自叙伝(1948.11.26作成)

- 出生時は祖父母・父母・姉の6人家族。1926年に兄山公立普通学校に入学。病気で1年遅く卒業し、1933年に平壤の光成高等普通学校に入学。1938年に卒業してすぐに日本に行き、島根県松江市の松江高等学校理科に入学し自然科学を勉強。1941年に卒業した。

²⁴ このあたりから解放の年まで離婚、再婚、借金などプライベートなことが多く、また履歴書ともズレていてわかりにくい。省略しておく。

- 「同年〔1941年〕4月に日本の京都市にある京都帝国大学工学部工業化学科に入学し一般有機合成の学習を専攻し、1943年9月に同大学を卒業した。」在学時には社会科学などは学ばず、自然科学の学習がおもしろく、「特に化学技術習得にのみ努力したのである。」「大学を卒業後、その当時、志願兵・学兵・徴用がしだいにひどくなっていくようであり、あれこれ就職先を求めようとし、当時日本の京都帝国大学工学部にいた李升基、李泰圭両氏の紹介で京城市慶雲町にあった金剛製薬所研究部に就職し、医薬合成研究に努力しているうちに、8.15解放を迎えたのである。」
- 「8.15解放後、すぐに北朝鮮への準備をしていたとき、日本の京都大学教授だった李升基氏が来ることになり、1945年11月から京城大学理工学部実験指導講師の仕事をするようになった。〔…〕1946年3月に数ヶ月前先に興南工場に来ていた李在業²⁵さんリジェオプトンム（現在ソ連に留学中）の連絡を受け、興南工場に来る準備をしていたところ、米軍のトラックの衝突で大打撲傷を負い、約4カ月間の治療を受けて休養し、1946年9月に興南工場に来て、技術者として現在まで工作している。1947年1月から本宮工場有機合成課休転工場の復旧事業に参加し、アルコール²⁶、純硝酸(민초산)製造等に協力した。1947年5月に本宮工場研究課長の責任をうけもち、研究事業の強化推進に協力した。1947年9月1日からは生産次長兼研究課長を兼任し、興南工業大学講師の任命をうけて有機化学講座を担当している。」 →以下略

補足

- 李升基が1950年7月末に38度線をこえて興南化学工場に到着したとき出迎えた「呉君」²⁷は呉東昱のことと思われる。回想記のなかで、李升基は「呉君は、京都大学でわたしのずっと後輩にあたる科学者であった。かれは才能にめぐまれた覇気のある青年であった。解放直後に、ソウルで何回か会ったことがあるが、1946年ころからは消息をたっていた。それでわたしは、おそらく北へ行ったのだろうと推測してはいたが、この本宮で再会しようとは思ってもいなかった」と述べている。

⑨李在英リジェヨン

履歴書(1948.11.27作成)

- 1921.6.1、平安南道江東郡高泉面で出生。
- 父母：8.15前=商業(平壤中央商会) → 8.15後=事務員(弘民商社)
- 政党関係：労働党(1946.10.12入党、北朝鮮労働党興南市党部；紹介=리재업, 홍성주)
- 知識：最終学歴=京都帝国大学卒業、技術=科学技術
- 経歴

²⁵ 李在業は1942-44年のあいだ京都帝大工学部工業化学科に在学していた。

²⁶ 李升基『ある朝鮮人科学者の手記』(未来社、1969、99頁)によれば、1950年、越北した李升基に対し呉東昱は「日本人もできなかったアルコール生産にも成功しました」(99頁)と報告し、それを聞いた李升基はカーバイドからアルコールが生成できるようになったことを驚いている。

²⁷ 同上書、96-100頁。

1927.4-1933.3	(平壤) 万寿公立普通学校・生徒
1933.4-1938.3	(平壤) 平壤公立高等普通学校・生徒
1938.4-1941.3	(九州) 福岡高等学校
1941.4-1943.9	(京都) 京都帝国大学・学生
1943.10-1945.8	(京都) 京都帝国大学・助手
1945.8-1945.9	(平壤) 建国準備委員会・職員
1945.10-1946.6	(平壤) 平壤工業専門学校・教授
1946.6-1948.5	(興南) 国営興南肥料工場・主任技師
1948.6-	(興南) 国営興南肥料工場・技師長

○被選経歴：1948.8.25 [興南市] 鶴島里選挙区 最高人民会議代議員

○外国語：日本語=熟達、露・英・独・仏=読解

○表彰：熱誠者(1947.8.15, 1948.8.15)、1947年人民経済計画超過完遂模範イルクン人民会議賞(1947.2.8)

自叙伝(1948.11.27 作成)：心情等を総括しており興味深いので長めに紹介

○家は江東郡の田畑1万坪、1年収穫100石程度の自作・地主で、1926年に閔波公立普通学校に入学した。1928年に父が子供の教育問題も考慮し農地を一部処分して、平壤に移住したのにもない、平壤の万寿公立普通学校に転校した。教育機会に恵まれなかった父の「学費はとにかくすべて出すから最高学府まで行く決心で学校を決めろ」ということばに感動し、勉強して平壤高等普通学校に合格した。1935年に父が商店を営みはじめてからは家庭経済が好転した。1938年に高普を卒業した。高等文官志向だった思潮に逆らい、理科を志望して1938年4月に九州の福岡高等学校に入学した。

○福岡高等学校の朝鮮人同胞は4名だった。出身成分からしてみな自由主義的で、「本人も安逸な生活を追求する存在だったが、こうした夢は長く支配的な影響を与えることはできなかった。日本人らと同等に勉学しながらも、やはり植民地民族だという隠しえない羞恥が常に胸を突き刺し、朝鮮故国の状態と同胞らの境遇を考えれば考えるほど、国家なき亡国の民族の苦しみを感じるようになった。しかしこうした現実の末に何らかの勇気を出して学業を捨てて反日闘争に立ち上がる勇気はなかった。ただ、現在の立場でできる範囲内で何かしてみようと、各高等学校在籍同胞と相互練磨と親睦を図る目的で1940年秋に各地に連絡をとっていたところ、某高等学校で発覚し、検挙旋風によって各地のこの事業は中断した。これと前後して、故国全土で創氏改名運動が実施されたため、在籍同胞らとともに反対運動を起こすと、官憲の注目を受けた。そうこうしているうちに1941年3月に同校を卒業し、朝鮮人同胞が多く集中している京都帝国大学工学部燃料化学科に入学した。

この当時、本人は同胞学生らと交際もせず孤独な生活を好んだ。同胞学生らの生活は小市民学生に特有の自由主義的傾向が濃厚で、学生らの気風も弛緩していく寒心たる状態だったため、先輩有志らと相談し京都帝大朝鮮人留学生同窓会という唯一の組織体を強化し強力に働きかけようという意見で一致し、本人が同窓会委員長に選ばれて工作了。しかし同窓会構成員らの自由主義的な傾向によって所期の成果をあげることができなかった。戦争が激化していく時期であり、わが同窓会にも深刻な影響を及ぼし、同窓

会機関紙は同年停刊となり、のちに同窓会までも解散命令を受けることになった。

これと前後し、学年短縮問題が実施され、1943年9月に京都帝大を卒業し、工場に就職しようとしたが、朝鮮人であるという理由で適切な職場を得ることができず、苦勞していたところ、在学当時の主任教授の超民族的なあたたかい親切によって大学に残って研究することに決定し、同年10月1日から京都帝大助手として任命された。これが学生生活を抜けだし社会生活の第一歩だった。志願兵実施後、ふたたび学徒兵強制募集等々の思想的受難期をむかえ、後進たちに正しい道を進むよう専心努力したが、このときまで本人自身が確固たる人生と世界観を立てることができず、また指導力が微弱であったため、あらゆる問題をしかるべきときに明快に解決できずにいた。左翼的思想は、ある体系のもとで理論と学習を通じてではなく、本人の親族である韓載徳^{ハンジェドク}²⁸が家庭的に多くの影響を与えたのであり、また日本留学中に無意識的に培養された日本帝国主義的植民地政策とともに社会に表明化している社会的矛盾を解決してくれる、そうした社会建設を望むところから出発していたのである。いわば、世界観において空想的社会主義建設を夢見る類型の一人だった。こうした状況のなかで、在籍同胞らは浅薄な退廃主義的に流れていく暗澹たる状態だった。

情勢がしだいに陰悪になっていったため、1945年4月に現職のまま一時的な帰国を口実として故国に帰った。戦争が激化していく時期であり、徴用、強制学徒兵制がおこなわれるであろうということで、都市へ農村へと居所を移動して足跡を隠していたところ、8.15解放を迎えることになった。

8月17日、留学生治安隊組織をつくると、走って行って同志らと相談し混乱に陥っていた治安を確保した。建国準備委員会に移り、技術班を組織し、各工場調査および接収事業を担当した。この事業が一段落したのち、平壤工業専門学校の復旧事業に努力し、同年10月から同校化学科主任教授として教鞭をとった。」

○残りの部分は、履歴書とほぼ同じことを羅列している。

⑩ ホン ユンミョン 洪允命

履歴書(1948.11.26 作成か)：全体的に記述が少ない

○1918.10.12、黄海東黄州郡黄州面で出生。父母は果樹園経営の「中農」

○外国経歴：1942.4-1944.9「日本京都市北白川区上経町 留学」²⁹

○経歴（職歴のみが基本的に記されている）

1944.10-1945.8 (平南江西郡) 朝日軽金属株式会社・研究員

1945.9-1946.2 (平南江西郡) 国営化学岐陽工場・調達課長

1946.4-1946.10 同・支配人

²⁸ 韓在徳について説明もなく親族だと述べているところを見ると、おそらく同じ平壤高普を出て早稲田大などで学び、林和らと文学評論活動をしたり『朝鮮中央日報』などを発行したり、1945年以降は『朝鮮中央通信』報道部長などを歴任した人物のことと思われる。その後、日本での活動を経て1959年に大韓民国に帰順し、反・金日成体制の言論を展開した。

²⁹ 京都帝大に通っていた時期の住所だと思われる。左京区北白川の町名であろうが不明。

1946.11-1947.4 (興南) 本宮化学工場・技術課長
1947.5-1948.6 同・研究課次長

自叙伝(1948.11.26 作成)：こちらも1頁の簡単なもの

○1932年に普通学校を卒業し、沙里院農業学校に進学。「事故の素質を漸次把握」したため、卒業後には延禧専門学校³⁰に進学した。1941年に卒業し、「就職する考えだったが、適当なところがなく、家庭の状況も余裕がなかったにもかかわらず、京都帝国大学に進学した。1944年9月に卒業し、平南江西郡東津面朝日軽金属岐陽工場に就職し研究部に勤務していたところ解放を迎えることになった。」

○あとの記述は羅列的だが、妻のことと思われる履歴の記述が興味深い。「== [経子か]は普通学校を終え、平壤西門女子校を卒業したのち、高等師範科を終え、その後姫路で教員生活を1年して帰郷後に結婚し、家事に従事していたところ解放を迎えた。解放後、平南岐陽=女中で時間教師として数カ月勤務したのち、ひきつづき家事に従事している。」

⑪ ソン ボフソフ 宋法燮

自叙伝(1948.11.26 作成)

○1922.1.8、全北群山市開福洞の「商人」(父母財産程度10万圓、土地無)で生まれる。

○政党関係：労働党(1946.8.28、興南市肥料工場党部)

○経歴

1928.4-1934.3 (群山) 群山普通学校・生徒
1934.4-1935.1 (群山) 群山小学校・生徒
1935.4-1940.3 (群山) 群山中学校・生徒
1940.4-1942.9 (熊本) 第五高等学校・生徒
1942.10-1945.9 (京都) 京都帝大工学部・学生
1945.11-1946.4 (ソウル) ソウル大学理工学部・講師
1946.5-1947.4 (興南) 興南工場本部研究課・技術者
1947.5-1948.5 (興南) 本宮工場第1有機課・副課長
1948.6-現在 (興南) 興南試験所・副所長
1948.9-現在 (興南) 興南工業大学・講師

○外国語：英語=解読、独語=解読

○表彰：模範労働者(1947.8.15, 1948.2.8；中央人民委員会)

○親友：呉東昱、김학헌

自叙伝(1948.11.26 作成)

○1922年、全州で布木商〔反物商〕5男として生まれる。1926年に家庭の事情で、群山に引っ越し、このときから長兄が米穀商事務員となり生活条件は少しよくなった。1934年に群山普通学校を卒業したが群山中学校に入れず、群山小学校に1年通ったのちに群山中学校に入った。1940年に卒業し理工学方面に進学するために、第五高等学校に入学、1942年9月に卒業。

○「このころ〔五高卒業のころ〕、自己の思想が一次的に確定され世界観もある程度確立さ

³⁰ 延禧専門学校の数物科本科に1938年4月入学した形跡がある(『毎日申報』1938.4.3)。

れた。1942年10月1日、京都帝大工学部繊維化学科に入学し、1945年9月30日に動向を卒業した。1945年8月15日、わが祖国の解放と同時に10月末帰国し、11月からソウル大学理工学部講師として就職した。米帝国主義反動政策が露骨化し、その野獣が学窓にまで映し出された。米植民地政策に反対し、直接工業に献身したいと、興南に1946年5月に来て、興南人民工場研究課に就職した。」

⑫^リ李桂秀^グ

履歴書(1948.9と記されてはいる)

○1918.7.5、慶南陝川郡陝川面で生まれる。父母は消費組合事務で「極貧」。

○政党関係：労働党(1946.8.28、興南市党部)

○経歴

1925.4-1931.3	(陝川) 陝川公立普通学校・生徒
1932.4-1937.3	(東萊) 東萊高等普通学校・生徒
1938.4-1941.3	(山口) 山口高等学校・生徒
1941.3-1942.3	(静岡) 日本軽金属株式会社・社員見習
1942.4-1944.9	京都帝国大学工学部・学生
1944.10-1945.8	京都帝国大学化学研究所・研究員
1945.9-1946.4	(陝川) ハングル講習所・講師
1946.5-1948.5	興南地区本宮工場アンモニア・副課長
1948.6-現在	国営興南火薬工場・技師長

○外国語：日語=会話読書、英語=会話読書、独語=少し会話・読書、露語=科学書籍読書

○表彰：愛国労働(1947.8.15)、創意考案(1948.2.8)

○親友関係：李在英、李在業

自叙伝(1948.11)

○貧農(小作農)の長男として生まれる。1925年に旅館業をはじめが祖母に任せ、協同組合に加入した。小学校時代は比較的富裕であったが、徐々に衰退し、1933年に祖母の逝去により旅館も廃業となった。中等教育を卒業し、「1年間店を手伝っていたが、向学心をおさえきれず、姉の多少の援助を受けて日本の山口高等学校に入学した。

1940年10月、病中にあった父親が死去したが、当時私は山口在留朝鮮人学生親睦会が非合法的であるという理由により山口警察署で2ヶ月も拘留中だった。家勢は次第に衰退し、やむをえず学業を中断し故郷に戻ってきて、母校の学父兄会長の同情により再び学業を続けることができた。山口高等学校を卒業したが、学費の困難により学業を続けることができず、日本の静岡県静水市にある日本軽金属株式会社の労働者として入り、社員見習生として登用され、若干の学資を調達した。翌1942年に京都帝国大学工学部工業化学科に入学し、学友らの援助による苦学していたところ、弟を勉強させようと多くの苦勞してきた姉は30歳で病により死亡した。大学をかろうじて卒業したのち、就職が用意でなく、憤慨した。やむをえず、李升基博士の援助により、同大学化学研究所研究員として所属した。そのうちに解放となるや、故郷で啓蒙運動に参加する一方で、入北する準備を終え、1946年4月23日に京南晋州府の小市民リ・チャンギョ(리창교)の長女

リ・ボン(리봉)さんと結婚した。同年5月13日、興南肥料工場研究課長でその後ソ連に留学に行った李在業(大学同窓生)の案内により、興南に到着。5月11日、本宮工場に配属された。」

まとめ：京都帝大と興南工業地帯をつなぐもの

○1940年代の京都帝大において応用化学系の諸研究室にいた教員・学生³¹らのつながりが、興南工場を経て興南工業大学へと流れている。

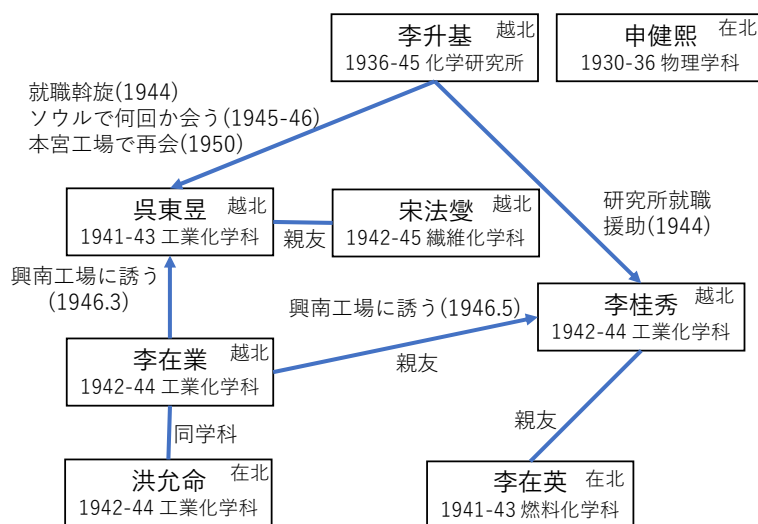


図 興南工業大学・工場をめぐる京都帝大ネットワーク

(備考) 「越北」=1945.8以降に北朝鮮に渡る / 「在在」=1945.8時点で北朝鮮にいる

3-6. 清津医科大学

⑬^{キムソンウ}金聲宇

履歴書(1948.12.18 作成)

○1894.5.22、咸境北道城津市溪泉里に生まれる。

○最終卒業学校：京城医学専門・医学博士

○発明：吐気胸＝琳巴促進についての発表

○経歴

- 1904.4-1907.3 (城津) 普信小学校・生徒
- 1907.4-1909.3 (城津) 同高等科・生徒
- 1909.4-1909.5 (城津) 協信中学校・生徒
- 1909.10-1914.4 (咸興) 永生中学校・生徒
- 1914.4-1918.9 (城津) 済東病院・助手
- 1924.4-1928.3 (ソウル) 京城医学専門学校・学生
- 1928.4-1931.3 (城津) 済東病院・医師
- 1931.4-1931.9 (東京) 東京帝大医学部・見学生

³¹ 『京都帝国大学一覽 昭和十七年度』の応用化学系の朝鮮人学生を見ると、工業化学科の1941年度入学に「松田東昱」(=呉東昱)、1942年度入学に「岩田武造」(=李桂秀)、「星江允命」(=洪允命)、「李在業」、燃料化学科の1941年度入学に「木本在英」(=李在英)、繊維化学科の1941年度入学に「圓城文輝」(=金文輝)、1942年度入学に「金山泰烈」(=金泰烈)とある。

1931.10-1932.3 (城津) 濟東病院・副院長
 1932.4-1938.11 (城津) 金聲宇病院・開業医
 1938.12-1942.11 (京都) 京都帝国大学・研究生
 1942.11-1945.8 (城津) 金聲宇病院・開業医
 1945.8- (城津) 城津第一病院・院長

自叙伝(作成日不明) : 「留学生」とは少し違うため簡単に

○1904 に両親が城津に定着→協信中学校→廃止→永生中学校を出て、城津濟東病院の庶務課員・検査員・調剤手・助手をやっているうちに、「医師になろうという欲望が高度に達し」た。1918 年から学資のため雑貨商をはじめていたところ、3.1 運動に参加し逮捕され、1920 年に出獄。また濟東病院に再就職し、院長長女の周旋で京城医専に入学。1928 年に卒業して濟東病院に医師として就職。副院長として勤務していたとき、教会紛乱事件にまきこまれ、院長に学資を弁済して病院を辞職し、金聲宇病院を開院。1938 年、「長子の教育兼自身の研究のため同院を廃止し病院及医療施設を他医師に税で与え、京都帝国大学医学部薬物学教室に入局研究をはじめ、49 歳(1942 年)11 月に帰郷、開業を再開した。50 歳(1943 年)7 月 5 日に学位論文が通過し、同年 10 月 25 日に学位記が到着した。52 歳(1945 年)8 月 15 日に解放すると、開業を中止し、城津人民病院長の職につき、現在まで勤務中である。」

おわりに

- ある過渡期の断面：朝鮮戦争前、不定形のまま急速に体制がつくられている時期の断面
- 再構成された過去：語る過去の選択と再解釈をとまなう作文を通じた主体形成
- 京都：外国経験の一部を構成する／人のつながりのなかで位置づけられる
- 今後の課題：幅を広げ（専門学校なども）、個々人の調査を深める必要性

関連文献

- 국사편찬위원회, 2002, 『미국소재 한국사 자료 조사보고 III - NARA 소장 RG242 <선별노획문서>외 -』 .
- 김근배, 2002, 「월북 과학기술자와 흥남공업대학의 설립」, 『아세아연구』 98.
- , 2014, 「일제강점기 조선인들의 의사되기: 해방 직후 북한의 의과대학 교원들을 중심으로」, 『의사학』 23-3.
- , 2015, 「북한 함흥의과대학 교수진의 구성, 1946-48: 사상성과 전문성의 불안한 공존」, 『의사학』 24-3.
- 김기석, 2001, 『一卵性 雙生兒의 탄생, 1946: 국립서울대학교와 김일성종합대학의 창설』, 교육과학사.
- 김진혁, 2015, 「재북(在北)의사의 식민지・해방 기억과 정체성 재편(1945-1950): 『평양의학대학』, 『함흥의과대학』, 『청진의과대학』 자서전을 중심으로」 『역사문제연구』 34.
- 鄭鍾賢 & 水野直樹, 2012, 「日本帝國大學의 朝鮮留學生 研究 (1): 京都帝國大學 朝鮮留學生의 現況, 社會경제적 출신 배경, 졸업 후 경력을 중심으로」 『大東文化研究』 80
- 허운정 & 조영수, 2014, 「해방직후 북한 의학교육의 형성 1945-48」 『의사학』 23-2.
- 洪宗郁, 2011, 『戰時期朝鮮의 轉向者たち: 帝國/植民地の 統合と 亀裂』 有志社.